

# 児童における対人的感謝と向社会的行動の関係： 発達の視点からの検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KITAMURA, Mizuho メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4300">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4300</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 児童における対人的感謝と向社会的行動の関係 — 発達の視点からの検討 —

児童学部 児童学科 北村 瑞穂

**要旨：**近年、道德教育への関心が高まり、子どもの発達段階を考慮した教授法が求められている。道德性の発達支援に活用できる心理学的知見が複数の研究から示されており、その中に感謝という感情を扱った研究がある。従来、感謝は向社会的行動を促進するため道德的感情と捉えられてきた。また、感謝を感じたときに生じる負債感<sup>1</sup>は日本の成人に特徴的な感情である。しかし児童に負債感が生じているかは十分に検証されていない。本研究では日本の児童において感謝と負債感が向社会的行動に及ぼす影響を探索的に検討した。小学4年生から6年生に質問紙調査を実施した結果、対人的感謝は概ね向社会的行動を促進していた。一方、負債感<sup>2</sup>は学年と向社会的行動の対象（見知らぬ人、友だち、家族）によって複雑に向社会的行動に影響しており、対人的感謝が高い児童の負債感が向社会的行動を抑制する場合もあった。これらの道德的感情の発達を教育的観点から考察した。

**キーワード：**感謝、負債感、向社会的行動、発達、児童

近年、日本では道德教育への関心が高まりつつある。これには小中学校で、道德の授業が教科として位置づけられ実施されることが理由にある（松尾，2016）。松尾（2016）は、小学校高学年頃から児童にとって道德科の授業がつまらなくなってくるという調査結果があることから、発達段階を考慮した授業改善が必要であると述べている。小嶋（2016）は、道德性の発達支援について感情の言語化や感情調節を練習するなどのスキルトレーニングの有効性や、感情調整、自己や他者の感情の認知・推測、感情を表現する言葉やシグナル、感情の原因の理解といった感情そのものの知識の発達に目を向けることの重要性について述べており、心理学の知見が活用できるとしている。また、海外ではポジティブ心理学の基礎研究をもとに様々な教育方法が教育現場で実施されており、子どもや青年の well-being を高めたり、学校への関わりを強めたりするなど、一定の成果を上げている（Seligman, Ernst, Gillham, Reivich, & Linkins, 2009; Shoshani, & Steinmetz, 2013）。このように、日本では効果的な道德教育の教授法が求められており、心理学的知見が道德性の発達支援に有効である可能性が示唆されている。そして、これらの道德性の研究の中に“感謝”という感情を用いた研究がある。

McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson (2001) は、感謝は共感や罪悪感のような道德的感情

に類似している感情であり、対人関係の変化を感じ取るバロメータであり、道德的行動（向社会的行動）を促進し、非道德的行動を抑制することができる<sup>3</sup>と述べている。Bartlett & DeSteno (2006) も、感謝は助けてくれた相手との関係を保つように作用し、相手への返報を促進する動機づけとなることを実験によって示した。このように感謝は向社会的行動と結びつく感情であることが明らかにされている。

さらに、感謝は well-being や人生の幸福感にも関連していることが複数の研究から示されている。Froh, Bono, & Emmons (2010) は、青年期の早い段階において感謝は近隣の人々やコミュニティだけでなく、世界といったマクロレベルな社会に恩返ししたいというモチベーションにつながると考え、縦断的研究によってこれを検討した。10歳から14歳の700名の中学生の感謝と向社会的行動、人生満足感、社会的統合を介入が始まる前と3ヶ月後、6ヶ月後で測定した。ベースラインの感謝は6ヶ月後の社会的統合を予測し、3ヶ月後の向社会的行動と人生満足度がそれに影響を及ぼしていた。感謝と社会的統合が連続的に高めあうように生じ、感謝が感情的、社会的な well-being に望ましい影響を与える可能性が示唆された。また、Tian & Huebner (2016) は4年生から6年生の児童の感謝と向社会的行動と学校満足感の関係を検討した。その結果、感謝しやすい児童は向社会的行動を取る傾

向が強まるだけでなく、学校においてポジティブ感情を経験しており、それが学校満足感を高めることを明らかにした。この他にも、Lyubomirsky & Layous (2013) は感謝を表明することが幸福感を高めると述べている。Wood, Joseph, & Maltby (2008) は、感謝を感じやすい性格特性と well-being には強い関係があり、日頃から感謝の念を抱きやすい性格の人は、人生の満足度が高いとしている。このように感謝は向社会的行動を促進し、幸福感や well-being を高める感情であることが示されている。

前述のように、従来から感謝は肯定的感情と捉えられてきた (McCullough et al., 2001; Tsang, 2006)。しかし、他者からの援助を受け取ることは常に被援助者にポジティブ感情をもたらすわけではない。例えば、Greenberg (1980) は、援助の受け手は送り手に対して、返報をしなければならないという義務感を抱くとした。このようなネガティブ感情を負債感と呼び、これを低減するために返報が促進されると述べている。

それでは、感謝を感じる状況では、どのような感情が生じているのだろうか。蔵永・樋口 (2010) は、国内の大学生を対象に感謝の構造を明らかにする試みを行った。感謝の生起状況と感謝体験の多様性を考慮し、感謝生起状況は、被援助、贈物受領、状態好転、平穏、他者負担の 5 種類作成した。結果から、それらの状況における感情体験は、満足感、申し訳なさ、不快感の 3 種類であった。そのうち不快感は非常に不快な感情体験であり通常の感謝の感覚とは異なること、感謝の感情体験を表現する語を収集した面接調査においても、満足感と申し訳なさを構成する項目は多数報告されたが、不快感を構成する項目はほとんど報告されていなかったことから、感謝の感情体験は満足感と申し訳なさの 2 種類であると結論づけている。Naito, Wangwan, & Tani (2005) は、向社会的行動と負の相関があった否定的感情については感謝には含めず、肯定的感情と負債感情で感謝は構成されているとしている。この結果は蔵永・樋口 (2010) と概ね一致している。したがって、日本では他者から援助を受けた状況で体験される感情が 3 種類ある。このうち強いネガティブ感情である否定的感情や不快感は、生起頻度が低く、向社会性と負の関連を持つため、感謝の感情には含めることは適切でないとして、向社会的行動を促進している“うれしい”などの肯定的感情や満足感と“こころ苦しい”などの負債感情や申し訳なさが感謝状況で体験される感情であると捉えられている。

この負債感日本人において強く生じるものである

可能性が複数の研究から示唆されている。Naito & Washizu (2015) は、感謝と負債感についての比較文化研究で、日本では他者からの援助を受けたときの負債感の強さが特徴的であると述べている。一言・新谷・松見 (2008) はアメリカの大学生と比べると日本の大学生はより強く負債感を感じる傾向があることを明らかにした。日本とタイの大学生で感謝の文化比較研究を行った Naito et al. (2005) においても、タイより日本の大学生がより強い負債感を感じていた。

前述のように、McCullough et al. (2001) は、感謝は向社会的行動を促進するとしている。また Greenberg (1980) は負債感を低減するために返報が促進されると述べている。それでは、日本において感謝と負債感に向社会的行動にどのように影響を及ぼしているのだろうか。前述した Naito et al. (2005) はタイと日本の大学生の感謝と負債感を比較し、他者から恩恵を受けた場合に日本もタイの大学生も肯定的感情と負債感情を持つことを明らかにした。この肯定的感情は向社会的動機づけを高めていた。また日本の男子学生において負債感情が向社会的動機づけを高めていた。日本の女子学生については、援助の望ましさを統制した場合に負債感が向社会的動機づけを高めた。

蔵永・樋口 (2013) は国内の大学生を対象に、感謝生起状況における状況評価と感情体験が対人行動に及ぼす影響を検討している。結果は、贈物受領条件を除いて、被援助条件、他者負担条件における対人行動 (感謝表現、返礼行動、向社会的行動) は、感謝生起状況の種類に関わらず、基本的には満足感か申し訳なさによって促進されることを示しており、感謝生起後に向社会的行動が生じることが確認された。

さらに白木・五十嵐 (2016) は、研究 2 において、プレゼントをもらう状況を設定し、感謝と負債感が喚起されるプロセスを実験的に検討した。プレゼントの受け手にとってのプレゼントの価値と、プレゼントを贈る側のコスト (プレゼント選びにかけた時間) を操作した。結果から、他者から向社会的行動を受けた際に抱く受け手にとってのプレゼントの価値は、受け手の感謝を生起し、送り手への直接的互惠行為と間接的互惠行為を促進した。一方、向社会的行動のコストの大きさは負債感を喚起していなかったが、直接的互惠行為を促進した。このように日本の成人においては、基本的には感謝と負債感に向社会的行動に影響を及ぼす感情であると捉えられてきた。

しかし、感謝と向社会的行動を扱った国内の研究は大学生を対象としたものが多く、国内の子どもを対象

とした感謝の研究は少ないのが現状である。そのため、藤原・村上・西村・濱口・櫻井（2014）は、感謝は道徳的感情とされているが、児童において感謝がこうした機能を有しているかは実証的研究が十分でないとして述べている。

国内の子どもを対象にした感謝の研究には以下のようなものがある。藤原・村上・西村（2013）は小学校4年生から6年生を対象に感謝が生起する状況と感謝の表現について、自由記述調査を実施した。結果から、感謝が生起する状況には2つのカテゴリがあり、何かを作ってもらったり貸してもらったりすることなどの道具的な被援助と、ポジティブな状況において褒めてもらったりネガティブな状況において励まされたりするなどの情緒的な被援助があった。一方、感謝の表現には感謝の言明、返報行動、伝える際の表現、伝達方法という4つのカテゴリがあった。感謝の言明は返報行動より多く、小学校高学年において感謝はすでに言語を通じて行われるようになってきていることが示された。

また負債感に関連して、大島（2016）は児童期における未返報時の不快感情の発達的变化を検討している。友だち（または親）が忘れ物を自宅まで届けてくれたが、お返しができなかったという場面を設定し、小学2年生と4年で比較を行った。結果から、2年生では未返報時の被援助者の怒りと未返報時の不快感情の関連が見られた。一方、4年生では返報が重要で返報が可能であると認識しており、返報できないことを不快に感じることを示された。4年生の段階では“できるはずの返報ができない”ことに不快感情が生じており、4年生頃からは被援助により心理的負債が生じる可能性が示されている。しかし大島（2016）では、児童の未返報時の不快感情を捉えることが目的であるため、“お友だちがすぐにいなくなってしまったので、お返しをすることができませんでした。お返しができなかったときにがっかりしたり、嫌な気持ちになりますか？それはどのくらいですか？”と質問している。ここで問われている不快感情は負債感を含んでいると考えられるが、感謝生起状況では通常生じない強い否定的感情も含まれている可能性もある。

なお、前述の藤原ら（2014）は児童用の対人的感謝尺度を開発している。この尺度はポジティブ感情、共感性、友人関係の良好さと正の関係をもっており、反対に攻撃性とは負の関係をもっている。対人的感謝得点には性差があり、男児より女児の得点が高かった。藤原ら（2014）は、この対人的感謝尺度とネガティブ感情の間には弱いながらも正の相関があることを報告

しており、これが感謝を感じたときに生じる日本特有の心象である負債感の影響なのかは検討の余地があるとしている。さらに発達の観点からも小学生においてすでに負債感が生じているのかを調べることは必要であると述べている。

以上のように、日本の児童において感謝や負債感が道徳的な機能を有しているかは実証的研究が十分ではない。国内の大学生では、感謝や負債感が向社会的性を高めていたが、児童において同様の結果が出るかは検討する必要がある。児童の感謝と負債感はどのように発達するのだろうか。そもそも児童において負債感のような複雑な感情が生じているのだろうか。これらの問いに対して、基礎的知見を積み重ねることは、子どもの道徳教育への貢献となるはずである。

なお、Froh et al. (2010)、Lyubomirsky & Layous (2013)、Wood et al. (2008) では、感謝が well-being や幸福感や人生の満足度などに関連していることが示されているが、これについても日本の児童で同様の結果となるか検討する必要がある。

本研究の目的は以下のとおりである。1つは日本の児童において、相手に何かをしてもらって自分からは返報できてない状況を想定した感謝生起場面において負債感が生じるかを検討する。大島（2016）では、4年生頃から未返報時に被援助者に負債感が生じる可能性が示されている。本研究では4年生以降に感謝生起場面で未返報時に負債感が生じているかを検討する。このとき、不快感情ではなく、返報への義務感である負債感を捉えるため“お礼をしなくてはいけないと思う”という質問項目を使用した。また、大島（2016）では、児童期における未返報時の不快感情の発達的变化を捉えることが目的であるため、友だち（または親）が忘れ物を自宅まで届けてくれたという場面設定で、感謝や申し訳なさが生じているかまでは確認していない。本研究では感謝想起場面で児童がこれらの感情を感じているかも確認することにした。

2つめは児童の対人的感謝と負債感が向社会的行動に及ぼす影響を検討する。日本人の大学生では、感謝と負債感が向社会的動機づけを高めることが示されている（Naito et al., 2005; Wangwan, 2005）。そのため、児童においても感謝と負債感に向社会的行動を促進する可能性がある。対人的感謝の測定には藤原ら（2014）の児童用の対人的感謝尺度を用い、向社会的行動の測定には村上・西村・櫻井（2016）の小中学生用対象別向社会的行動尺度を使用した。

3つめは日本の児童において、先行研究と同様に対

人的感謝や負債感が主観的幸福感と関連しているかを検討する。前述のように感謝は well-being や幸福感や人生の満足度などに関連していることが複数の研究で示されている (Froh et al., 2010; Lyubomirsky & Layous, 2013; Wood et al., 2008)。本研究では、内閣府経済社会総合研究所 (2012) の主観的幸福感の尺度を使用し、これを検討することとした。

## 方法

### 調査協力者

大阪府の小学校の4年生から6年生の計89名を調査対象とした。内訳は、小学4年生29名(男児13名、女児15名、性別無回答1名)、小学5年生34名(男児19名、女児15名)、小学5年生26名(男児15名、女児11名)であった。

### 調査期間

2016年12月14日から12月22日に実施された。

### 質問紙

質問紙の表紙には表紙に無記名で実施されること、調査への参加は本人の自由意思であり、いつ調査を撤回してもいかなる不利益も生じないことを明記した。研究協力者が児童であることから、漢字にルビをふり、児童の理解できる文面にした。使用した尺度と感謝想起場面は以下の通りである。

【対人的感謝尺度】藤原ら(2014)の小学生における対人的感謝尺度を使用した。“ふだんの生活の中で、まわりの人に感謝することがたくさんあります”、“他の人に感謝することを書き出したら、たくさん書けません”などの8項目で構成されている。これらの項目に対して“あてはまる(4点)”、“どちらかといえばあてはまる(3点)”、“どちらかといえばあてはまらない(2点)”、“あてはまらない(1点)”の4件法で回答を求めた。

【向社会的行動尺度】村上ら(2016)の小中学生用対象別向社会的行動尺度を使用した。この尺度は、見知らぬ人、友だち、家族に対する向社会的行動を測定する計18項目であり、“いつものした(4点)”、“まあまあした(3点)”、“少しした(2点)”、“やったことがない(1点)”の4件法で尋ねた。

【主観的幸福感尺度】内閣府経済社会総合研究所(2012)の主観的幸福感の尺度を使用した。現在の幸福感を“とても不幸せ(0点)”から“とても幸せ(10点)”の11件法で尋ねた。

【感謝想起場面の設定】負債感は児童には理解が難しいことが懸念された。そのため、大島(2016)をも

とに感謝と負債感の両方が生じそうな感謝生起場面を作成した。大島(2016)から、小学4年生は親より友だちにお返しできない場合に、より不快な感情が生じることが示されているため、本研究では友だちを援助者としてシナリオを作成した。具体的には、「友だちが筆箱の忘れ物を自宅まで届けてくれたが、友だちが急いでいたため、お礼を言ったり、何かお返しすることができなかった」という感謝想起場面を作成した。

【場面感謝】感謝想起場面で場面感謝が生じているかを確認するため“うれしい”と“感謝する”の2項目を場面感謝の尺度とした。

【不快感情】感謝想起場面で不快感情が生じているかを確認するため、大島(2016)の不快感情の項目“がっかりしたり、嫌な気持ちになりますか?”を“嫌な気持ち”と“がっかり”の2項目に分離して使用した。

【申し訳なさ】感謝想起場面で申し訳なさが生じているかを確認するため、Wangwan(2005)の“相手にわるいなという気持ち”や蔵永・樋口(2010)の“申し訳なさ”を児童に理解できるように“ごめんなさい”に表現を変えて使用した。

【負債感】感謝想起場面で負債感が生じているかを確認するため、Greenberg(1980)をもとに返報への義務感を測定するため“お礼をしなくてはいけないと思う”を使用した。

これらの場面感謝と不快感情と申し訳なさの負債感の計6項目について“あてはまる(4点)”、“ほとんどあてはまる(3点)”、“だいたいあてはまる(2点)”、“少しあてはまる(1点)”、“あてはまらない(0点)”の5件法で回答を求めた。

### 手続き

学級ごとに一斉調査を実施した。アンケートは無記名で実施すること、嫌な場合には回答しなくともよいことを説明した。次に質問紙の2つの記入例(“朝ご飯はパンを食べる”“家で歌を歌う”)を示しながら、記入方法を説明した。調査項目を1つずつ読み上げ、それに合わせて児童が回答した。最後に、性別と学年の回答を求めた。アンケート回答中に児童から質問が出た場合は、個別に質問に対応した。所要時間は約20分であった。

## 結果

回答に不備があった2名を除き、87名の回答を分析対象とした(Table 1)。内訳は、小学4年生27名

(男児 13 名、女児 14 名)、小学 5 年生 34 名 (男児 19 名、女児 15 名)、小学 6 年生 26 名 (男児 15 名、女児 11 名) である。一般線形モデル以外の分析には HAD (Ver. 15.200 清水, 2016) を使用した。

尺度の内的信頼性を検討するため、対人的感謝 8 項目について  $\alpha$  係数を求めたところ、 $\alpha=.85$  であった。場面感謝の“うれしい”と“感謝する”の 2 項目では  $\alpha=.64$  であった。不快感情の“がっかり”と“嫌な気持ち”の 2 項目では  $\alpha=.80$  であった。向社会的行動 (見知らぬ人)、向社会的行動 (友だち)、向社会的行動 (家族) の各 6 項目では、順に  $\alpha=.80$ 、 $\alpha=.72$ 、 $\alpha=.68$  であった。したがって、対人的感謝、場面感謝、不快感情と向社会的行動について概ね十分な内的整合性が確認された。

各得点の学年 (4 年生・5 年生・6 年生) と性別 (男児・女児) の平均値を Table 1 に示した。

#### 感謝想起場面において生じている感情

感謝想起場面において、場面感謝と不快感情と負債感が想起しているかを確認した。感謝想起場面について、児童の平均場面感謝 (3.68) が、“だいたいあてはまる (2 点)” と有意な差があるか t 検定を行ったところ、有意に高かった ( $t(86)=27.23, p<.001$ )。平均申し訳なさ (2.71)、平均負債感 (3.22) についても各尺度の midpoint (2) と有意な差があるか t 検定を行ったところ、いずれも有意に高かった (順に  $t(86)=4.66, p<.001$ ;  $t(86)=8.88, p<.001$ )。したがって、本研究の感謝想起場面について、負債感や申し訳なさだけではなく感謝も感じていたことが確認された。

#### 発達的变化と性差

それぞれの尺度の発達的变化を性別ごとに検討するため、学年 (4 年生・5 年生・6 年生) と性別 (男児・女児) を独立変数とする 2 要因分散分析を行った。

対人的感謝を従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、学年の主効果と性別の主効果と学年×性別

の交互作用がともに有意でなかった (順に  $F(2, 81)=0.13, p=.89$ , 偏  $\eta^2=0.00$ ;  $F(1, 81)=2.31, p=.13$ , 偏  $\eta^2=0.03$ ;  $F(2, 81)=0.88, p=.42$ , 偏  $\eta^2=0.02$ )。

場面感謝を従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、学年の主効果と性別の主効果と学年×性別の交互作用がともに有意でなかった (順に  $F(2, 81)=1.51, p=.23$ , 偏  $\eta^2=0.04$ ;  $F(1, 81)=0.56, p=.45$ , 偏  $\eta^2=0.01$ ;  $F(2, 81)=2.32, p=.11$ , 偏  $\eta^2=0.05$ )。

不快感情を従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、学年の主効果が有意であった ( $F(2, 81)=7.27, p=.001$ , 偏  $\eta^2=0.15$ )。Bonferroni 法による多重比較の結果、4 年生が 5 年生より不快感情が高く、4 年生が 6 年生より不快感情が高かった (順に  $p=.01, d=1.55$ ;  $p=.01, d=1.17$ )。その他の主効果と交互作用はともに有意でなかった (順に  $F(1, 81)=.20, p=.66$ , 偏  $\eta^2=0.00$ ;  $F(2, 81)=1.28, p=.28$ , 偏  $\eta^2=0.03$ )。したがって、不快感情は 4 年生から 5 年生にかけて低下することが明らかになった。

申し訳なさを従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、学年の主効果と性別の主効果と学年×性別の交互作用がともに有意でなかった (順に  $F(2, 81)=0.99, p=.38$ , 偏  $\eta^2=0.02$ ;  $F(1, 81)=0.11, p=.74$ , 偏  $\eta^2=0.00$ ;  $F(2, 81)=0.27, p=.76$ , 偏  $\eta^2=0.01$ )。

負債感を従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、学年の主効果と性別の主効果と学年×性別の交互作用がともに有意でなかった (順に  $F(2, 81)=0.40, p=.96$ , 偏  $\eta^2=0.00$ ;  $F(1, 81)=3.55, p=.06$ , 偏  $\eta^2=0.04$ ;  $F(2, 81)=0.64, p=.53$ , 偏  $\eta^2=0.02$ )。

見知らぬ人への向社会的行動を従属変数とする 2 要因分散分析を行ったところ、学年×性別の交互作用が有意であった ( $F(2, 81)=3.82, p=.03$ , 偏  $\eta^2=0.09$ )。下位検定を行ったところ、男児の単純主効果が有意であったため ( $F(2, 81)=4.47, p=.01$ , 偏  $\eta^2=0.17$ )、Bonferroni 法による多重比較を行った。その結果、

Table 1 学年男女別の各尺度の平均値

学年 性別	4		5		6		全体
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	
N	13	14	19	15	15	11	87
対人的感謝(1-4)	3.23 (0.52)	3.21 (0.70)	3.19 (0.47)	3.38 (0.66)	3.08 (0.43)	3.44 (0.36)	3.24 (0.54)
場面感謝(0-4)	3.92 (0.19)	3.64 (0.53)	3.46 (0.87)	3.67 (0.52)	3.60 (0.54)	3.95 (0.15)	3.68 (0.58)
不快感情(0-4)	3.19 (1.25)	2.82 (1.01)	1.71 (1.45)	2.40 (1.33)	1.67 (1.26)	1.73 (1.38)	2.22 (1.39)
申し訳なさ(0-4)	3.08 (1.32)	3.00 (1.47)	2.32 (1.49)	2.73 (1.53)	2.67 (1.23)	2.64 (1.63)	2.71 (1.43)
負債感(0-4)	3.23 (1.24)	3.36 (1.08)	2.95 (1.61)	3.47 (0.83)	2.80 (1.66)	3.73 (0.65)	3.22 (1.28)
向社会的行動(見知らぬ人)(1-4)	3.04 (0.63)	2.79 (0.65)	2.52 (0.50)	2.99 (0.49)	2.90 (0.38)	3.19 (0.38)	2.87 (0.55)
向社会的行動(友だち)(1-4)	2.85 (0.61)	2.71 (0.71)	2.54 (0.65)	2.84 (0.51)	2.81 (0.44)	3.33 (0.34)	2.81 (0.59)
向社会的行動(家族)(1-4)	3.08 (0.58)	2.85 (0.76)	2.64 (0.55)	2.96 (0.64)	2.88 (0.34)	3.09 (0.51)	2.89 (0.58)
幸福感(1-10)	8.00 (2.31)	7.64 (2.41)	7.47 (2.34)	7.73 (2.74)	7.07 (1.98)	7.82 (1.83)	7.60 (2.26)

Note. ( ) 内は SD

4年生の男児が5年生の男児より有意に見知らぬ人への向社会的行動が高かった ( $p=.01, d=1.37$ )。4年生と6年生、5年生と6年生の間には有意差はなかった (順に  $p=.48, d=.27$ ;  $p=.04, d=.73$ )。その他の主効果と性別の主効果と学年×性別の交互作用は有意でなかった (順に  $F(2, 81)=2.33, p=.10, \text{偏}\eta^2=0.05$ ;  $F(1, 81)=2.28, p=.14, \text{偏}\eta^2=0.03$ )。

友だちへの向社会的行動を従属変数とする2要因分散分析を行ったところ、学年の主効果が有意であった ( $F(2, 81)=3.31, p=.04, \text{偏}\eta^2=0.08$ )。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、6年生が4年生より有意に友だちへの向社会的行動が高かった ( $p=.01, d=1.07$ )。4年生と5年生、5年生と6年生の間には有意差はなかった (順に  $p=.54, d=.23$ ;  $p=.04, d=.84$ )。性別の主効果と学年×性別の交互作用はともに有意でなかった (順に  $F(1, 81)=3.42, p=.07, \text{偏}\eta^2=0.04$ ;  $F(2, 81)=2.24, p=.11, \text{偏}\eta^2=0.05$ )。

家族への向社会的行動を従属変数とする2要因分散分析を行った結果、学年の主効果と性別の主効果と学年×性別の交互作用が有意でなかった (順に  $F(2, 81)=0.95, p=.39, \text{偏}\eta^2=0.02$ ;  $F(1, 81)=0.62, p=.43, \text{偏}\eta^2=0.01$ ;  $F(2, 81)=1.81, p=.17, \text{偏}\eta^2=0.04$ )。

主観的幸福感を従属変数とする2要因分散分析を行ったところ、学年の主効果と性別の主効果と学年×性別の交互作用がともに有意でなかった (順に  $F(2, 81)=0.18, p=.84, \text{偏}\eta^2=0.00$ ;  $F(1, 81)=0.19, p=.67, \text{偏}\eta^2=0.00$ ;  $F(2, 81)=0.38, p=.69, \text{偏}\eta^2=0.01$ )。

#### 対人的感謝と負感性が向社会的行動に及ぼす影響

各尺度間の相関係数を Table 2 に示した。対人的感謝は、場面感謝と申し訳なさとの間に有意な正の相関があった。負感性は、対人的感謝と場面感謝と申し訳なさとの間に

有意な正の相関があった。

児童の対人的感謝と負感性が向社会的行動 (見知らぬ人、友だち、家族) に及ぼす影響を検討するため、見知らぬ人、友だち、家族それぞれへの向社会的行動得点を目的変数として、学年 (4年生・5年生・6年生)、対人的感謝、負感性 (いずれも連続変数、多重共線性を回避するために平均値により中心化した値を使用) とそれらの交互作用を説明変数とする一般線形モデルによる分析を行った。感謝の程度に性差があるという知見があるため、性別 (男児・女児) を統制変数に含めた。また、向社会的行動 (見知らぬ人、家族) と申し訳なさにも有意な相関が認められたため、申し訳なさも統制変数とした。

1) 見知らぬ人への向社会的行動 分析の結果 (Table 3)、対人的感謝の主効果が有意であった。対人的感謝が低い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=2.68$ ) よりも対人的感謝が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=3.10$ ) のほうが見知らぬ人への向社会的行動が有意に高かった。また、学年×対人的感謝×負感性の交互作用が有意だったため、下位検定を行った (Figure 1a-1c)。4年生について下位検定を行った結果、対人的感謝×負感性の単純交互作用が有意であり ( $F(1, 73)=4.35, p=.04, \text{偏}\eta^2=0.06$ )、4年生の対人的感謝が高いとき (平均+1SD)、負感性の単純・単純主効果が有意であった ( $F(1, 73)=8.75, p=.004, \text{偏}\eta^2=0.11$ )。4年生の対人的感謝が高いとき、負感性が低い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=2.78$ ) よりも負感性が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=3.48$ ) のほうが見知らぬ人への向社会的行動が有意に高かった。4年生の対人的感謝が低いとき (平均-1SD)、負感性の単純・単純主効果は有意ではなかった ( $F(1, 73)=0.38, p=.54, \text{偏}\eta^2=0.01$ )。5年生について下位検定を行った結果、対人的感謝×負感性の単純交互作用が有意であったが ( $F(1, 73)=4.69, p=$

Table 2 各尺度間の相関係数

	対人的感謝	場面感謝	不快感情	申し訳なさ	負感性	向社会的行動 (見知らぬ人)	向社会的行動 (友だち)	向社会的行動 (家族)
対人的感謝	1.00							
場面感謝	.29 **	1.00						
不快感情	-.13	-.23 *	1.00					
申し訳なさ	.34 **	.27 *	.58 **	1.00				
負感性	.26 *	.44 **	.14	.30 **	1.00			
向社会的行動 (見知らぬ人)	.43 **	.32 **	.16	.27 *	.34 **	1.00		
向社会的行動 (友だち)	.47 **	.39 **	.12	.18	.32 **	.84 **	1.00	
向社会的行動 (家族)	.40 **	.27 *	.20	.30 **	.24 *	.79 **	.54 **	1.00
主観的幸福感	.13	-.01	.02	.15	.04	.01	.01	.07

Note. \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

Table 3 向社会的行動（見知らぬ人、友だち、家族）に対する各要因の効果

目的変数 説明変数	見知らぬ人				友だち			家族		
	df	F	p	偏 $\eta^2$	F	p	偏 $\eta^2$	F	p	偏 $\eta^2$
学年	2	1.64	.20	0.04	2.18	.12	0.06	0.49	.62	0.01
性別	1	0.40	.53	0.01	0.57	.46	0.01	0.01	.93	0.00
对人的感謝	1	12.00	>.001	0.14	20.38	>.001	0.22	11.50	.001	0.14
負債感	1	3.05	.09	0.04	2.17	.15	0.03	0.41	.53	0.01
申し訳なさ	1	0.39	.53	0.01	0.17	.69	0.00	1.01	.32	0.01
学年×对人的感謝	2	0.75	.48	0.02	0.89	.42	0.02	1.40	.25	0.04
学年×負債感	2	1.49	.23	0.04	2.31	.11	0.06	0.04	.96	0.00
对人的感謝×負債感	1	0.00	.98	0.00	0.18	.68	0.00	0.30	.59	0.00
学年×对人的感謝×負債感	2	4.42	.02	0.11	6.57	.002	0.15	5.44	.01	0.13
誤差	73									

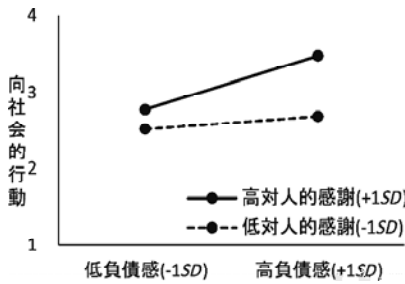


Figure 1a 4年生の向社会的行動（見知らぬ人）に対する对人的感謝と負債感の影響

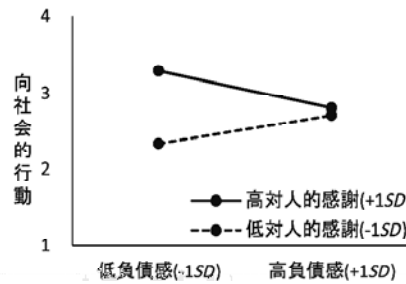


Figure 1b 5年生の向社会的行動（見知らぬ人）に対する对人的感謝と負債感の影響

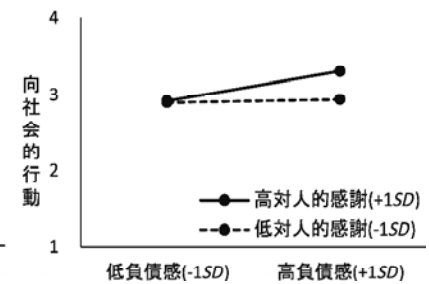


Figure 1c 6年生の向社会的行動（見知らぬ人）に対する对人的感謝と負債感の影響

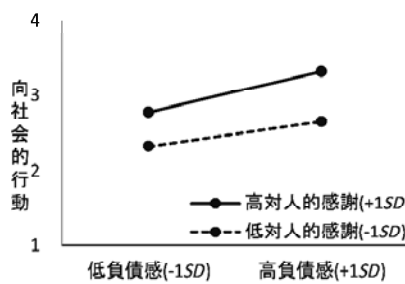


Figure 2a 4年生の向社会的行動（友だち）に対する对人的感謝と負債感の影響

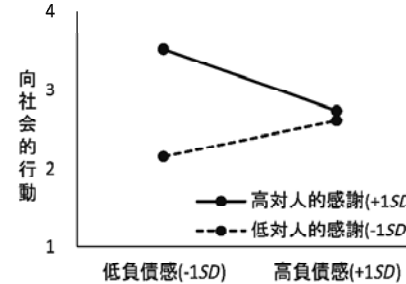


Figure 2b 5年生の向社会的行動（友だち）に対する对人的感謝と負債感の影響

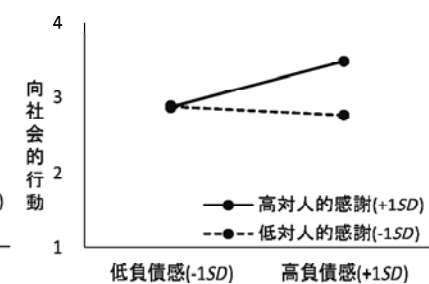


Figure 2c 6年生の向社会的行動（友だち）に対する对人的感謝と負債感の影響

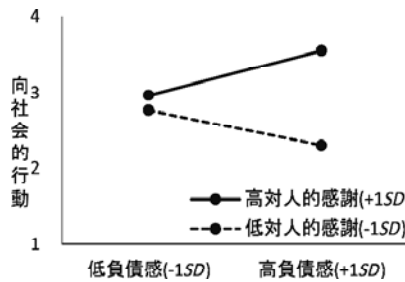


Figure 3a 4年生の向社会的行動（家族）に対する对人的感謝と負債感の影響

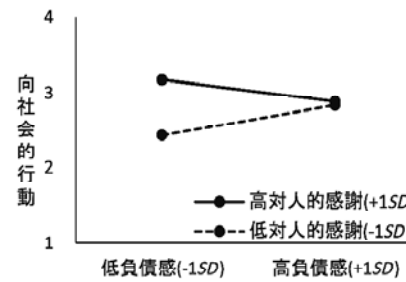


Figure 3b 5年生の向社会的行動（家族）に対する对人的感謝と負債感の影響

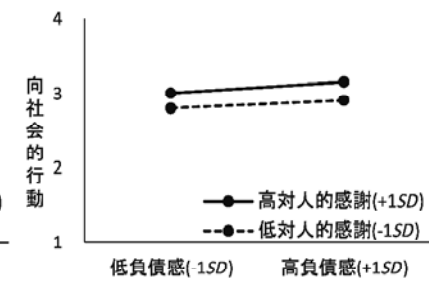


Figure 3c 6年生の向社会的行動（家族）に対する对人的感謝と負債感の影響

.03, 偏 $\eta^2=0.06$ )、5年生の对人的感謝が高いとき(平均+1SD)の負債感の単純・単純主効果( $F(1, 73)=2.34, p=.13$ , 偏 $\eta^2=0.03$ )、5年生の对人的感謝が低いとき(平均-1SD)の負債感の単純・単純主効果( $F(1, 73)=1.99, p=.16$ , 偏 $\eta^2=0.03$ )はいずれも有

意ではなかった。6年生について下位検定を行った結果、对人的感謝×負債感の単純交互作用は有意ではなかった( $F(1, 73)=0.42, p=.52$ , 偏 $\eta^2=0.01$ )。

2) 友だちへの向社会的行動 分析の結果 (Table 3)、对人的感謝の主効果が有意であった。对人的感謝が低



い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=2.57$ ) よりも対人的感謝が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=3.12$ ) のほうが友だちへの向社会的行動が有意に高かった。また、学年×対人的感謝×負債感の交互作用が有意であったため下位検定を行った (Figure 2a-2c)。4年生について下位検定を行った結果、対人的感謝×負債感の単純交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 73)=0.86, p=.36, \text{偏}\eta^2=0.01$ )。5年生について下位検定を行った結果、対人的感謝×負債感の単純交互作用が有意であり ( $F(1, 73)=11.00, p=.001, \text{偏}\eta^2=0.13$ )、5年生の対人的感謝が高いとき (平均+1SD)、負債感の単純・単純主効果が有意であった ( $F(1, 73)=5.76, p=.02, \text{偏}\eta^2=0.07$ )。5年生の対人的感謝が高いとき、負債感が低い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=3.53$ ) よりも負債感が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=2.74$ ) のほうが友だちへの向社会的行動が有意に低かった。5年生の対人的感謝が低いときも (平均-1SD)、負債感の単純・単純主効果が有意であった ( $F(1, 73)=5.04, p=.03, \text{偏}\eta^2=0.06$ )。5年生の対人的感謝が低いとき、負債感が低い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=2.15$ ) よりも負債感が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=2.61$ ) のほうが友だちへの向社会的行動が有意に高かった。6年生について下位検定を行った結果、対人的感謝×負債感の単純交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 73)=1.68, p=.20, \text{偏}\eta^2=0.02$ )。

3) 家族への向社会的行動 分析の結果 (Table 3)、対人的感謝の主効果が有意であった。対人的感謝が低い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=2.68$ ) よりも対人的感謝が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=3.13$ ) のほうが家族への向社会的行動が有意に高かった。また、学年×対人的感謝×負債感の交互作用が有意であったため、下位検定を行った (Figure 3a-3c)。4年生について下位検定を行った結果、対人的感謝×負債感の単純交互作用が有意であり ( $F(1, 73)=10.90, p=.001, \text{偏}\eta^2=0.13$ )、4年生の対人的感謝が高いとき (平均+1SD)、負債感の単純・単純主効果が有意であった ( $F(1, 73)=5.15, p=.003, \text{偏}\eta^2=0.07$ )。4年生の対人的感謝が高いとき、負債感が低い場合 (平均-1SD:  $\widehat{M}=2.97$ ) よりも負債感が高い場合 (平均+1SD:  $\widehat{M}=3.55$ ) のほうが家族への向社会的行動が有意に高かった。4年生の対人的感謝が低いとき (平均-1SD)、負債感の単純・単純主効果は有意ではなかった ( $F(1, 73)=2.85, p=.10, \text{偏}\eta^2=0.04$ )。5年生、6年生それぞれについて下位検定を行った結果、いずれも対人的感謝×負債感の単純交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 73)=2.41, p=.12, \text{偏}\eta^2=0.03; F(1, 73)=0.00, p=.99,$

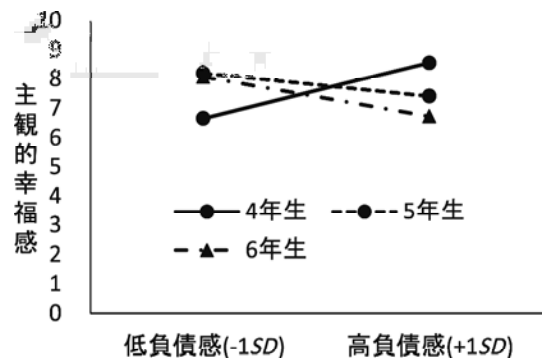


Figure 4 主観的幸福感に対する対人的感謝と負債感の影響

偏 $\eta^2=0.00$ )。

### 対人的感謝と負債感が主観的幸福感に及ぼす影響

次に、主観的幸福感を目的変数として向社会的行動と同様の一般線形モデルによる分析を行った (Figure 4)。学年×負債感の交互作用が有意であったため ( $F(2, 73)=3.30, p=.04, \text{偏}\eta^2=0.08$ )、各学年 (4年生、5年生、6年生) における負債感の単純主効果について下位検定を行った結果、負債感の単純主効果はいずれも有意ではなかった (順に、 $F(1, 73)=3.58, p=.06, \text{偏}\eta^2=0.05; F(1, 73)=0.71, p=.40, \text{偏}\eta^2=0.01; F(1, 73)=2.53, p=.12, \text{偏}\eta^2=0.03$ )。他の主効果、交互作用はいずれも有意ではなかった (順に  $F(1, 73)=0.23, p=.80, \text{偏}\eta^2=0.01; F(1, 73)=0.02, p=.89, \text{偏}\eta^2=0.00; F(1, 73)=3.52, p=.07, \text{偏}\eta^2=0.05; F(1, 73)=0.02, p=.89, \text{偏}\eta^2=0.00; F(1, 73)=0.74, p=.39, \text{偏}\eta^2=0.01; F(1, 73)=2.68, p=.08, \text{偏}\eta^2=0.07; F(1, 73)=0.01, p=.94, \text{偏}\eta^2=0.00; F(1, 73)=1.64, p=.20, \text{偏}\eta^2=0.04$ )。したがって先行研究で見られたような感謝と主観的幸福感の関連は、本研究で調査した日本の児童では得られなかった。

### 考察

本研究の目的は以下のとおりである。1つは日本の児童において、相手に何かをしてもらったのに自分からは返報できていない感謝生起場面を想像した場合に負債感が生じるかを確認する。2つめは児童の対人的感謝と負債感が向社会的行動に及ぼす影響を検討する。3つめは児童において、対人的感謝や負債感が主観的幸福感と関連しているかを検討する。

まず、友だちに筆箱を自宅まで届けてもらったという感謝生起場面でも場面感謝が生じているか確認したところ、“うれしい”、“感謝する”といった場面感謝を感じていることが明らかになった。さらに日本において特徴的な“ごめんなさい”という申し訳なさも生じ

ていた。場面感謝得点と申し訳なさ得点は、いずれの学年と性別でも差がなかった。この感謝や申し訳なさを感じている状況において、児童は“お礼をしなければいけないと思う”という負債感を感じていた。したがって、日本の児童において負債感が生じていることが確認されたと言える。

不快感情は、4年生が5年生と6年生より高かった。大島（2016）では、2年生から4年生にかけて不快感情が高まっていたが、本研究の結果から、その後の5年生と6年生で不快感情は低下する可能性が示唆された。4年生に比べて5年生と6年生にとって、友だちに筆箱を届けてもらうという状況がそれほど重大な問題ではなくなるのかもしれない。

2つめの目的として、児童の対人的感謝と負債感が向社会的行動に及ぼす影響を検討した。結果から、対人的感謝の主効果が有意であり、見知らぬ人、友だち、家族に対する向社会的行動を促進する傾向が全般に認められた。したがって大学生を対象とした先行研究と同様に、児童でも対人的感謝が向社会的行動を生じさせている傾向が明らかになった。日本の児童において、対人的感謝が道徳的感情であることが本研究の結果から示されたと言える。

一方、負債感が向社会的行動に及ぼす影響については、より複雑な結果が示された。4年生は、対人的感謝が高ければ負債感が高まるほど見知らぬ人と家族へ向社会的行動を行う傾向が認められたが、学年が上がるとその傾向は見られなくなった。また、友だちへの向社会的行動については学齢上昇に伴う連続的な変化は認められなかった。4年生と6年生には負債感の友だちへの向社会的行動への影響はなかった。しかし5年生には対人的感謝が低ければ負債感が高まるほど友だちへの向社会的行動が高まり、対人的感謝が高ければ負債感が高まるとかえって友だちへの向社会的行動が低下するという傾向が見られた。本研究では、友だちが忘れ物を届けてくれるという場面に限定して調査を実施していることから、友だちへの向社会的行動についてだけ、見知らぬ人や家族への向社会的行動と異なる傾向が認められた可能性もある。しかしながら、本研究の範囲では、なぜこのような結果が生じたのかは想像の域を出ず、今後の研究を待たねばならない。

なお、藤原ら（2014）は、対人的感謝尺度とネガティブ感情の間には弱いながらも正の相関があり、これが感謝を感じたときに生じる日本特有の心象である負債感の影響なのかは検討の余地があったとしていた。本研究では、対人的感謝尺度と申し訳なさや負債感には正

の相関があり、不快感情とは相関がなかった。したがって、対人的感謝尺度のネガティブ感情は、申し訳なさや負債感と類似したものである可能性がある。

3つめに日本の児童において対人的感謝や負債感が主観的幸福感と関連しているかを検討した。結果から、主観的幸福感是对人的感謝と負債感のいずれにも関連がなく、先行研究で得られたような、感謝が幸福感を高める効果は見いだせなかった。この理由として、本研究で測定した主観的幸福感、0から10の11段階で平均値が7.60 ( $SD=2.26$ ) であり、天井効果となったために対人的感謝や負債感との関係が認められなかった可能性がある。今後、異なる幸福感の尺度を用いて検討する必要があるだろう。

本研究の結果を教育現場にどのように応用できるだろうか。対人的感謝については、概ねいずれの学年と性別においても向社会的行動を促進することが示された。したがって、児童には日常的に対人的感謝が感じられるような環境を提供することが適切であると考えられる。一方、負債感については向社会的行動への影響が一貫していなかった。5年生では、日頃の対人的感謝が高くても、友だちにお返しをしなければならないという負債感が強く生じると、向社会的行動を抑制する傾向があった。一方、5年生で対人的感謝が低く、負債感が高い場合には向社会的行動が促進されていた。本研究の範囲では、子どもにとって負債感を感じるものが適切なかは判断が難しく、対人的感謝とは異なり、負債感に関しては教育現場への応用が難しいかもしれない。今後、日本の教育現場で効果的な道徳の教育方法を実施していくためには、さらに感謝や負債感や向社会的行動の研究を蓄積していく必要がある。

#### 引用文献

- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319–325.
- Froh, J. J., Bono, G., & Emmons, R. A. (2010). Being grateful is beyond good manners: Gratitude and motivation to contribute to society among early adolescents. *Motivation and Emotion*, 34, 144–157.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨（2013）. 小学生における感謝生起状況とその表明についての探索的研究 筑波大学発達臨床心理学研究, 24, 19–26.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳・櫻井茂男（2014）. 小学生における対人的感謝尺度の作成

- 教育心理学研究, 62, 187-196.
- Greenberg, M. S. (1980). A theory of indebtedness. In K. Gergen, M. S. Greenberg, & R. H. Willis (Eds.), *Social exchange: Advance in theory and research* (pp. 3-26). New York: Plenum Press.
- 小嶋佳子 (2016). 道徳性の発達支援—心理学的知見の活用—愛知教育大学研究報告. 教育科学編, 65, 117-125.
- 蔵永瞳・樋口匡貴 (2010). 感謝の構造—生起状況と感情体験の多様性を考慮して— 感情心理学研究, 18, 111-119.
- 蔵永瞳・樋口匡貴 (2013). 感謝生起状況における状況評価と感情体験が対人行動に及ぼす影響 心理学研究, 84, 376-385.
- 松尾直博 (2016). 道徳性と道徳教育に関する心理学的研究の展望—新しい時代の道徳教育に向けて— 教育心理学年報, 55, 165-182.
- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2016). 家族, 友だち, 見知らぬ人に対する向社会的行動—対象別向社会的行動尺度の作成— 教育心理学研究, 64, 156-169.
- 内閣府経済社会総合研究所 (2012). 生活の質に関するインターネット調査結果 (検討用資料) [http://www.esri.go.jp/jp/prj/current\\_research/shakai\\_shihyo/pdf/houkoku4.pdf](http://www.esri.go.jp/jp/prj/current_research/shakai_shihyo/pdf/houkoku4.pdf) (アクセス 2017年8月21日)
- Naito, T., Wangwan, J., & Tani, M. (2005). Gratitude in University Students in Japan and Thailand. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 36, 247-263.
- Naito, T., & Washizu, N. (2015). Note on Cultural Universals and Variations of Gratitude. *International Journal of Behavioral Science*, 10, 1-8.
- 一言英文・新谷優・松見淳子 (2008). 自己の利益と他者のコスト—心理的負債の日米間比較の研究— 感情心理学研究, 16, 3-24.
- Lyubomirsky, S., & Layous, K. (2013). How do simple positive activities increase well-being? *Current Directions in Psychological Science*, 22, 57-62.
- McCullough, M. E., Kilpatrick, S. D., Emmons, R. A., & Larson, D. B. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127, 249-266.
- 大島みずき (2016). 児童期における未返報時の不快感情の発達的变化 感情心理学研究, 23, 87-94.
- Seligman, M. E. P., Ernst, R. M., Gillham, J., Reivich, K., & Linkins, M. (2009). Positive education: Positive psychology and classroom interventions. *Oxford Review of Education*, 35, 293-311.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 白木優馬・五十嵐祐 (2016). 向社会的行動の受け手の感謝および負債感を喚起する要因の検討 心理学研究, 87, 474-484.
- Shoshani, A., & Steinmetz, S. (2013). Positive psychology at school: A school-based intervention to promote adolescents' mental health and well-being. *Journal of Happiness Studies*, 14, 1163-1181.
- Tian, L., Chu, S., & Huebner, E. S. (2016). The chain of relationships among gratitude, prosocial behavior and elementary school students' school satisfaction: The role of school affect. *Child Indicators Research*, 9, 515-532.
- Tsang, J. (2006). Gratitude and prosocial behavior: An experimental test of gratitude. *Cognition and Emotion*, 20, 138-148.
- Wangwan, J. (2005). 日本とタイの大学生における感謝心の比較研究 (2) 日本道徳性心理学研究, 19, 1-12.
- Wood, A. M., Joseph, S., & Maltby, J. (2008). Gratitude uniquely predicts satisfaction with life: Incremental validity above the domains and facets of the five factor model. *Personality and Individual Differences*, 45, 49-54.

#### 謝辞

本研究にご協力いただきました小学校の先生方、児童の皆様様に心より感謝申し上げます。